

## 編集後記

筆者のみなさんからは早い時期に原稿をお預かりしていたのに、作業が延び延びになってしまったことを、読者のみなさまにお詫び申し上げたい。私は2010年5月に愛媛県の山奥にある実家にUターンしたが、今号では愛媛出身の西川至さんに出会うことができたし、私の同居人である土井利彦さんもわが山里のことを書いてくれた。また、西村俊さんのジビエ活用のお話や、山下祐介さんの東京と地方との関係性についての分析も思い当たることがあり、とても興味深いものがあった。また、木俣さんの憲法論は氏の書棚を覗くようなところがあり、この国のことを考えさせられた。

2016年4月から地元の「愛媛新聞」に週に一度のコラムを頼まれ、山暮らしのことを書かせてもらっている。これまで、いろんな人取材して文字にすることはあったが、自分の思いをそれなりの意見として表出することはなかったのが、最初は戸惑った。任期は1年で、残り2か月になったが、ここまでくると逆に「もっと伝えたい」という思いが強くなり、新たな表現の場をつくることの必要性を感じるようになっていく。

さて、地方ではよく、「うちの地域には何もなくて、つまらないところです」という言葉が聞かれる。それに対して「いやいや、そんなことはないでしょう」と相手の謙遜を受け止め、愛想笑いをしてお茶を濁すような光景に出くわす。なんだかなあ…とってしまうが、実際、私の生まれた大洲市大川地区はほんとうに何もないと思っていた。もちろん、肱川というアユのとれる川があり、その川を利用して5月には鯉のぼりの架け渡しなども行われているが、これは多くの地方でも行われている。

ところで、愛媛県に伊予市<sup>ふたみ</sup>双海町という町がある。双海町は松山市や近隣の<sup>うちこ</sup>内子町などと比べて知名度が低い。全国にアピールできるものは何もない。住民は誰もがそう思っていた。しかし、「瀬戸内海に沈む美しい夕日があるじゃないか!」と気づいた人がいる。地域おこしのパイオニアとして、今では全国から声がかかる若松進一さんだ。しかし、若松さん自身が最初に夕日に気づいたのではない。よそからやってきたテレビ局の記者に、その美しさをほめられて「そうか!」と一大決心をしたのだ。何もない海岸を「夕日のミュージアム」というフィールドミュージアムにして道の駅を併設、「しずむ夕日が立ちどまるまち」というキャッチフレーズで、ユニークな地域おこしを行っている。

「何もない町はない。何もしていない人がいるだけだ」と若松さんは言う。そのとおりだと思う。私も地元・大川地区で何かしたいと思っていたが、その一歩を踏み出せなかった。それは地元には仲間がいなかったからだ。ところが数は少ないけれど、どんどん過疎化していく一方であるのをはがゆく思っている同士がいることがわかった。そのときの喜びをどう表現すればよいだろう。昨年からは月に一度の会合をつづけるなかで、NPOを立ち上げて、地元にある築80年ほどの古い醤油店の建物を拠点に地域づくりを模索することにした。週末カフェやマルシェ、考えるための講座や映画会など、したいことは山のようにある。しばらくはこの活動で忙しくなりそうだ。

宮本幹江

(2017年1月)

